

ニュートン法による最適化では、式(1.36)を満足するように最適ベクトル値  $K$  を繰り返りし法によって探索する。すなわち、 $(m+1)$ ステップにおける  $K$  の値を  $K^{m+1}$ 、 $m$ ステップにおける値を  $K^m$  としたとき、次式(1.39)が成立するとして補正ベクトル  $\Delta K$  をいかに客観的かつ迅速に算出するかが主要課題となる。

$$K^{m+1} = K^m + \Delta K \quad (1.39)$$

$$\Delta K = [\Delta c_{11} \quad \Delta c_{12} \quad \Delta c_{13}]^T \quad (1.40)$$

#### (4) 目的関数の評価基準と最小化条件

$(m+1)$ ステップでの誤差項  $e_i(K^{m+1})$  を、 $K^m$  のまわりで1次の項まで Taylor 級数展開すると次のようになる。

$$\begin{aligned} e_i(K^{m+1}) = & e_i(K^m) + \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{11}} (c_{11}^{m+1} - c_{11}^m) \\ & + \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{12}} (c_{12}^{m+1} - c_{12}^m) \\ & + \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{13}} (c_{13}^{m+1} - c_{13}^m) \end{aligned} \quad (1.41)$$

式(1.41)の誤差項に関する感度係数は、式(1.34)、(1.35)及び式(1.37)を用いて、次式で計算される。

$$\left\{ \begin{aligned} \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{11}} &= -\frac{1}{\sqrt{q_i^*}} \frac{\partial q_i(K^m)}{\partial c_{11}} = -w_{i1} \\ \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{12}} &= -\frac{1}{\sqrt{q_i^*}} \frac{\partial q_i(K^m)}{\partial c_{12}} = -w_{i2} \\ \frac{\partial e_i(K^m)}{\partial c_{13}} &= -\frac{1}{\sqrt{q_i^*}} \frac{\partial q_i(K^m)}{\partial c_{13}} = -w_{i3} \end{aligned} \right. \quad (1.42)$$

式(1.42)の関係式を用いると、式(1.41)は以下のように書き換えることができる。

$$\begin{aligned} e_i(K^{m+1}) &= e_i(K^m) - w_{i1} \Delta c_{11} - w_{i2} \Delta c_{12} - w_{i3} \Delta c_{13} \\ &= E - W \Delta K \quad (i=1,2,\dots,N) \end{aligned} \quad (1.43)$$

ここに、

$$\left\{ \begin{array}{l} E = [e_1 \ e_2 \ \dots \ e_i \ \dots \ e_N]^T \\ W = \begin{bmatrix} w_{11} & w_{12} & w_{13} \\ w_{21} & w_{22} & w_{23} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ w_{i1} & w_{i2} & w_{i3} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ w_{N1} & w_{N2} & w_{N3} \end{bmatrix} \\ \Delta K = \begin{bmatrix} \Delta c_{11} \\ \Delta c_{12} \\ \Delta c_{13} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c_{11}^{m+1} - c_{11}^m \\ c_{12}^{m+1} - c_{12}^m \\ c_{13}^{m+1} - c_{13}^m \end{bmatrix} \end{array} \right. \quad (1.44)$$

すなわち、 $E$  は観測流量と計算流量の差からなる  $(N \times 1)$  行列、 $W$  は感度係数からなる  $(N \times 3)$  行列、 $\Delta K$  はモデル定数の補正項からなる  $(3 \times 1)$  行列である。

式(1.36)の目的関数のもとに  $K^{m+1}$  の値を算出することになるが、 $K^m$  は既知であるので、目的関数の評価基準は次のように変換される。

$$\begin{aligned} & \underset{\Delta K}{\text{Min}} J(K) \\ & = \sum \left\{ e_i(K^m) - w_{i1} \Delta c_{11} - w_{i2} \Delta c_{12} - w_{i3} \Delta c_{13} \right\}^2 \\ & = (E - W \Delta K)^T (E - W \Delta K) \\ & = [E^T E] - 2(\Delta K)^T [W^T E] + (\Delta K)^T [W^T W] (\Delta K) \end{aligned} \quad (1.45)$$

式(1.45)の最小化条件は次式で与えられる。

$$\frac{\partial J(K)}{\partial (\Delta K)} = -2[W^T E] + 2[W^T W] \Delta K = 0 \quad (1.46)$$

式(1.46)から補正ベクトル  $\Delta K$  は次式で計算される。

$$\Delta K = [W^T W]^{-1} [W^T E] \quad (1.47)$$

式(1.47)を解くにあたり、最適値すなわち  $|\Delta K|$  の値が十分に小さい値に収束するか、

$|\Delta K / K^m|$  が許容限界値(通常は 0.001 ~ 0.01 程度)におさまるまで繰り返される。このため、効率よく  $\Delta K$  を計算する必要がある。

本報告では、 $W$  の列ベクトルを互いに直交化させる Cholesky 法を用いて、 $\Delta K$  を効率よく算定することができる成分回帰手法を併用した。